opera
Osaka Prefecture University
Education and Research Archives
大阪府立大学 学術情報リポジトリ

Title	看護学科学生の子どもとの接触体験および認識に関する調査 : 1983年の調査と比較して(人文社会科学系)
Author(s)	石原, あや; 藤井, 真理子; 鎌田, 佳奈美; 大森, 裕子
Editor(s)	
Citation	大阪府立看護大学医療技術短期大学部紀要. 2003, 8, p.65-72
Issue Date	2003-01-31
URL	http://hdl.handle.net/10466/1992
Rights	

http://repository.osakafu-u.ac.jp/dspace/

大阪府立看護大学医療技術短期大学部紀要，Vol 8, p.65-72, 2002
Bulletin of Osaka Prefecture College of Health Sciences

報　告

看護学科学生の子どもとの接触体験および認識に関する調査
－1983年の調査と比較して－

石原あや，藤井真理子，鎌田佳奈美，大森裕子

(大阪府立看護大学医療技術短期大学部看護学科)

Nursing Students' Contact Experiences with Children and Their Recognition of Children: Comparing Present Data to Those of 1983

Aya Ishihara, Mariko Fujii, Kanami Kamata and Hiroko Ohmori

(Department of Nursing, Osaka Prefecture College of Health Sciences)

Key words: 看護学生; 子どもとの接触体験; 子どもに対する認識; 子どもに対する関心

はじめに

1960年代のわが国における高度経済成長は，大きな社会変動をもたらしただけではなく，社会の最小単位である家族にも変化を引き起こした[1]。目黒[2]によれば，この時期は小家族化と核家族化が同時に生じた時期で，小家族化は，主として出生率，出生数の低下によるものであるという。

また堤[1]によれば，養育行動や母性行動は，世代から世代へと伝達される文化的に規定された行動であり，その取得過程において，親が子どもを育てている行動を観察する機会が重要であると述べている。しかし，少子，核家族が主流となった昨今の家庭では，日常的に育児の様子を観察する機会は減ってきていると考えられる。これは，私達が接している学生についても例外ではないと思われる。

小児看護を担当する私達は，教科展開の資料とする目的で，1978年に大阪府立看護短期大学が開学して以来，学生の子どもとの接触体験と認識状況に関する調査を続けてきた。これまでの調査では，学生の子どもとの接触体験は年ごとに減少していること，子どもに対する認識は浅いレベルにとどまっていることなどを明らかにした[3,4]。これらの結果を考慮し，講義においては，健康な子どもの成長発達の理解や保育，子どものケアに関する基礎的な知識の学習に多くの時間をあてている。方法としても，視聴覚教材や事例を多く導入してきた。しかし，子どもとの密接な関わりが要求される臨床実習において，これらを生かすことは難しく，子どもの反応や対応の仕方に戸惑う学生が多いのも実状である。

そこで今回は，学生への教育を再検討するにあたり，1994年から1998年までの間に入学した学生について，子どもとの接触体験や認識などの実態を見直した。また20年前つまり1960年代の家族の変動が大きな時期に生まれた学生と比較して変化がみられるのか，分析を試みたので報告する。

I. 方　　法

1. 対象

1994年から1998年までに大阪府立看護大学医療技術短期大学部 (1994年に大阪府立看護短期大学より名称変更) に入学した，3年課程の看護第一学科 (以下，看一とする) の学生218名，2年課程で准看護師資格を有する看護第二学科 (以下，看二とする) の学生219名の計437名である。

2. 調査方法

看一は2年次の4月，看二は1年次の10月の小児看護に関する科目の第1回目の講義時に，質問紙調査を行った。その際学生には，成績等には関係のないことを説明し，無記名にて，その場で回収した。回収率は，91.0%であった。

(受付日 2002年9月9日，受理日 2003年1月14日)

3. 調査内容

調査内容は，学生の属性，子どもとの接触体験およびその内容，子どもへの関心などである。子どもとの接触体験は，「度々ある」から「全然ない」までの4段階とし，子どもへの関心は，「非常にある」，「ある」，「ない」，「わからない」の選択肢より回答を求めた。また，子どもに対する認識および小児看護学の講義に期待することについては，自由記載とした。

4. 分析方法

統計分析ソフトはSPSS Ver. 11.0を用い，クロス集計を行った。1983年の調査（1978～1982年の入学生を対象）[11]との比較には，χ^2検定を行った。

II. 結　　果

1. 対象の属性

対象の属性は，表1に示す通りである。年齢は，看一では19歳が13.8%，20歳が68.8%，看二では18歳が22.4%，19歳が64.8%と，両学科とも80%以上が現役入学の学生であった。

出身地は，看一の75.7%，看二の63.9%が大阪府を中心とした近畿地方であった。地域特性としては，都市部のものが大半で，看一で74.3%，看二で82.2%であった。

同胞数は「1人」が，看一では52.8%，看二が56.6%であり，出生順位は「第1子」のものが，看一では54.1%，看二が43.8%であった。つまり，学生の約半数が2人きょうだいの長子ということになる。祖父母との同居率は，看一で16.5%，看二で19.6%である。

1983年の調査と比較すると，カリキュラムの関係から看一の調査時の学年に1年の差がある。他は，大阪府内の出身者が減少してはいるものの，学生の家族背景に大きな変動はなかった。

2. 子どもとの接触体験および関心度

表1　対象の属性

	1994～1998年		1978～1982年	
	看一(n=218)	看二(n=219)	看一(n=215)	看二(n=293)
出身地				
大阪府内	104 (47.7)	101 (46.1)	133 (62.0)	176 (60.1)
近畿地方(大阪府を除く)	61 (28.0)	39 (17.8)	47 (21.8)	16 (5.4)
中国地方	9 (4.1)	32 (14.6)	10 (4.8)	44 (15.0)
その他	32 (14.7)	39 (17.8)	25 (11.4)	57 (19.5)
無回答	12 (4.6)	8 (3.7)	0 (0.0)	0 (0.0)
年齢				
18歳	0 (0.0)	49 (22.4)	161 (74.9)	151 (51.6)
19歳	30 (13.8)	142 (64.8)	35 (16.3)	61 (20.8)
20歳	150 (68.8)	3 (1.4)	6 (2.8)	23 (7.8)
21歳	28 (12.8)	6 (2.7)	0 (0.0)	12 (4.1)
22歳以上	10 (4.6)	19 (8.7)	6 (2.8)	40 (13.7)
無回答	0 (0.0)	0 (0.0)	7 (3.2)	6 (2.0)
同胞数				
なし	15 (6.9)	16 (7.3)	22 (10.2)	32 (10.9)
1人	115 (52.8)	124 (56.6)	114 (53.6)	135 (46.1)
2人	71 (32.6)	58 (26.5)	65 (30.2)	86 (29.4)
3人	16 (7.3)	9 (4.1)	11 (5.1)	28 (9.6)
4人以上	0 (0.0)	3 (1.4)	3 (1.4)	12 (4.0)
無回答	1 (0.5)	9 (4.1)	0 (0.0)	0 (0.0)
出生順位				
第1子	118 (54.1)	96 (43.8)	123 (57.2)	151 (51.6)
第2子	82 (37.6)	91 (41.6)	68 (31.6)	105 (35.8)
第3子	16 (7.3)	20 (9.1)	21 (9.8)	24 (8.2)
第4子以降	1 (0.5)	3 (1.4)	3 (1.4)	13 (4.4)
無回答	1 (0.5)	9 (4.1)	0 (0.0)	0 (0.0)
世帯規模				
2人	4 (1.8)	6 (2.7)	3 (1.4)	9 (3.1)
3人	15 (6.9)	23 (10.5)	22 (10.2)	42 (14.3)
4人	101 (46.3)	97 (44.3)	103 (47.9)	113 (38.6)
5人	64 (29.4)	49 (22.4)	63 (29.3)	79 (26.9)
6人以上	34 (15.6)	38 (17.4)	24 (11.2)	50 (17.1)
無回答	0 (0.0)	6 (2.7)	0 (0.0)	0 (0.0)
祖父母との同居				
あり	36 (16.5)	43 (19.6)	25 (11.8)	46 (15.8)
なし	182 (83.5)	172 (78.5)	190 (88.2)	247 (84.2)
無回答	0 (0.0)	4 (1.8)	0 (0.0)	0 (0.0)

（　）は%

1) 子どもとの接触体験

子どもとの接触体験については表2に示した。看一で86.7%，看二で95.4%の学生が子どもとの何らかの接触体験を有していた。接触の程度は，「少しはある」が最も多く，看一で43.1%，看二では42.0%であった。

1983年の調査と比較すると，看一，看二ともに「ある」が有意に減少していた（ともに $p<0.01$）。また看二では，「少しはある」が有意に増加していた（$p<0.001$）。大半の学生は子どもと接したことはあるものの，その程度は少なくなってきていた。この傾向は看二において顕著であった。

2) 子どもへの関心度

学生による子どもへの関心度を表3に示した。「非常にある」と「ある」を合わせると，看一では90.8%，看二では85.2%と大半の学生が子どもに高い関心を示していた。

1983年の調査との比較では，看一では「非常にある」が有意に増加し（$p<0.01$），「ない」，「わからない」が有意に減少していた（前者 $p<0.05$，後者 $p<0.01$）。看二では「非常にある」，「ない」が有意に増加し（ともに $p<0.01$），「ある」が有意に減少していた（$p<0.05$）。このように看一では子どもへの関心は非常に高くなる傾向が，看二では関心が非常に高くなるものと，関心がないものの両極に分かれる傾向がみられた。

3) 子どもとの接触体験と関心度の関係

子どもとの接触体験と関心度の関係を，看一は表4に，看二は表5に示した。

看一では，接触度が「ある」で関心が「ある」学生は29.1%であり，前回の43.8%に対して有意に減少していた（$p<0.01$）。さらに接触度が「ない」で関心が「ある」学生は16.5%で，前回の5.8%に対し有意に増加しており（$p<0.01$），接触体験を伴わない関心の高さを示す学生が増えていることが特徴的であった。

看二では，接触度が「ある」で関心が「ある」学生は38.6%で，前回の52.7%に対し有意に減少し（$p<0.05$），また接触度が「ある」で関心は「わからない」学生が10.5%で，前回の42.9%に対して有意に減少していた（$p<0.05$）。逆に，接触度が「少しはある」で関心が「ある」学生は43.3%で，前回の22.4%に対し有意に増加していた（$p<0.001$）。看二でも，接触体験の程度が少なくなっているにもかかわらず，子どもに高い関心を示す学生が増えていた。

3. 接した子どもの発達段階および体験内容

1) 接した子どもの発達段階

学生が接した子どもの発達段階は，看一では「幼児」が最も多く，次いで「学童」，「乳児」の順であった。看二では，「幼児」，「乳児」，「学童」の順であった。

1983年の結果と比較すると，看一では「幼児」（$p<0.05$），看二では「乳児」（$p<0.001$）との接触体験が有意に減少していた。

2) 接した子どもとの関係

学生が接した子どもとの関係は表6に示した。看一では，「近所の子」，「きょうだい」との接触が多かった。看

表2 子どもとの接触体験の程度

		度々ある	ある	少しはある	ない	無回答
看一	1994 ～ 1998 年（n=218）	35（16.1）	60（27.5）	94（43.1）	27（12.4）	2（ 0.9）
	1978 ～ 1982 年（n=215）	36（16.7）	86（40.0） **	81（37.7）	27（12.4）	2（ 0.9）
看二	1994 ～ 1998 年（n=219）	43（19.6）	74（33.8）	92（42.0）	10（ 4.6）	0（ 0.0）
	1978 ～ 1982 年（n=293）	78（26.6）	142（48.5） **	70（23.9） ***	10（ 4.6）	0（ 0.0）

（ ）は%
** $p<0.01$ *** $p<0.001$

表3 子どもへの関心度

		非常にある	ある	ない	わからない	無回答
看一	1994 ～ 1998 年（n=218）	70（32.1）	128（58.7）	3（ 1.4）	13（ 6.0）	4（ 1.8）
	1978 ～ 1982 年（n=215）	39（18.1） **	137（63.7）	10（ 4.7） *	29（13.5） **	0（ 0.0）
看二	1994 ～ 1998 年（n=219）	58（26.5）	127（58.7）	11（ 5.0）	19（ 8.7）	4（ 1.8）
	1978 ～ 1982 年（n=293）	56（19.1） *	205（70.0） *	4（ 1.4） *	28（ 9.5）	0（ 0.0）

（ ）は%
* $p<0.05$ ** $p<0.01$

表4　看一の子どもとの接触体験と関心度

	関心度＼接触度	度々ある	ある	少しはある	ない	計
1994～1998	非常にある	19 (27.5)	20 (29.0)	27 (39.1)	3 (4.3)	69 (100.0)
	ある	13 (10.2)	37 (29.1)	56 (44.1)	21 (16.5)	127 (100.0)
	全然ない	0 (0.0)	1 (33.3)	2 (66.7)	0 (0.0)	3 (100.0)
	わからない	0 (0.0)	2 (15.4) *	8 (61.5)	3 (23.1) **	13 (100.0)
1978～1982	非常にある	11 (28.2)	15 (38.5)	13 (33.3)	0 (0.0)	39 (100.0)
	ある	22 (16.1)	60 (43.8)	47 (34.3)	8 (5.8)	137 (100.0)
	全然ない	1 (10.0)	4 (40.0)	5 (50.0)	0 (0.0)	10 (100.0)
	わからない	2 (6.9)	7 (24.1)	16 (55.2)	4 (13.8)	29 (100.0)

(　) は%
*p<0.05　**p<0.01

表5　看二の子どもとの接触体験と関心度

	関心度＼接触度	度々ある	ある	少しはある	ない	計
1994～1998	非常にある	17 (29.3)	22 (37.9)	17 (29.3)	2 (3.4)	58 (100.0)
	ある	20 (15.7)	49 (38.6)	55 (43.3)	3 (2.4)	127 (100.0)
	全然ない	2 (18.2)	0 (0.0)	6 (54.5)	3 (27.3)	11 (100.0)
	わからない	4 (21.1)	2 (10.5) *	12 (63.2) ***	1 (5.3)	19 (100.0)
1978～1982	非常にある	24 (42.9)	21 (37.5)	11 (19.6)	0 (0.0)	56 (100.0)
	ある	50 (24.4)	108 (52.7)	46 (22.4)	1 (0.5)	205 (100.0)
	全然ない	0 (0.0)	1 (25.0)	2 (50.0)	1 (25.0)	4 (100.0)
	わからない	4 (14.3)	12 (42.9)	11 (39.3)	1 (3.1)	28 (100.0)

(　) は%
* p<0.05　*** p<0.001

二では，「入院中の子」，「近所の子」，さらに保育所の子，いとこ，自分の子などを含む「その他」の子どもとの接触が多かった。

1983年の調査との比較では，看一では「きょうだい」が有意に増えていたが (p<0.05)，他の対象では有意差はみられなかった。看二では，「おい・めい」(p<0.05)，「入院中の子」(p<0.001) との接触が有意に減っていた。また看一，看二ともに，前回同様「近所の子」が多く，学生達はいまだ近隣との交流が遮断されてはいない健全な姿を保っていた。

3)　接した子どもの発達段階別の体験内容

乳児と接したことのある学生の体験内容は，看一では，「抱っこ」が50.5%と最も多く，次いで「授乳」が29.4%，「排泄介助」が25.7%であった。20年前との比較では，「入浴援助」が有意に増えていたものの (p<0.05)，他の項目では有意差は認められなかった。

看二における乳児との体験内容は，図1に示した。「抱っこ」が69.4%，「排泄介助」が61.2%，「授乳」が60.3%と，この3項目については6割以上の体験率があった。1983年の結果と比較すると，「排泄介助」，「授乳」，「入

表6 接した子どもとの関係

		きょうだい	おい・めい	近所の子	入院中の子	その他[1]	のべ回答数	対象数
看一	1994～1998年	92 (42.2) *	55 (25.2)	102 (46.8)	18 (8.3)	85 (39.0)	352	218
	1978～1982年	70 (32.6)	59 (27.4)	116 (54.0)	11 (5.1)	101 (47.0)	357	215
看二	1994～1998年	78 (35.6)	61 (27.9) *	114 (52.1)	134 (61.2) ***	110 (50.2)	497	219
	1978～1982年	84 (28.7)	111 (37.9)	155 (52.9)	232 (79.2)	145 (49.5)	727	293

複数回答あり
( ) は対象数に対する%
[1] 保育所の子，いとこ，自分の子，障害児などを示す。
* $p<0.05$ *** $p<0.001$

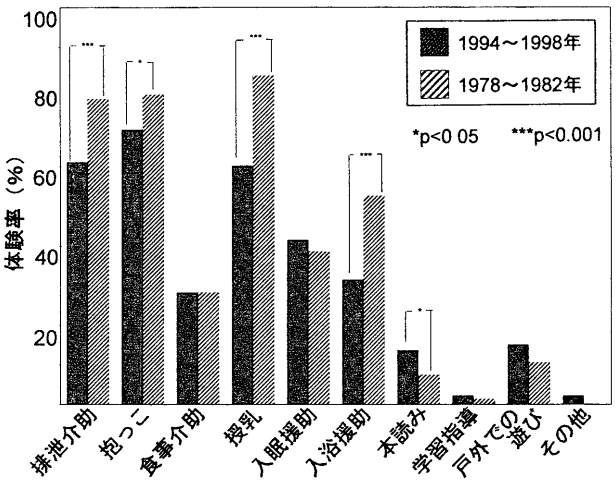

図1 看二における乳児との体験内容

浴援助」，「抱っこ」の4項目で体験率の有意な低下が認められた (抱っこ $p<0.05$，他の3項目 $p<0.001$)。一方，「本読み」は体験率が有意に高くなっていた ($p<0.05$)。

幼児との体験内容は以下の通りである。看一では多い順に，「戸外での遊び」が60.6%，「抱っこ」が58.3%，「本読み」が43.1%であった。看二では，「戸外での遊び」が72.1%，「本読み」が66.2%，「抱っこ」が62.1%と，この3項目については6割以上の体験率であった。看一，看二ともに，幼児の発達段階の特徴から遊びを通した関わりの体験率が高かった。1983年との比較では，看一では「戸外での遊び」が有意に減少し ($p<0.05$)，看二では「入眠援助」が有意に増加していた ($p<0.05$)。他の項目では，看一，看二ともに有意差はなかった。

学童との体験内容は，看一では「戸外での遊び」が49.1%，「学習指導」が42.7%の体験率であった。看二では，「戸外での遊び」が50.7%，「学習指導」が46.6%，「本読み」が27.9%の体験率であった。20年前との比較では，両学科ともに，どの項目においても有意差は認められなかった。

4. 子どもに関する認識

表7は，「子どもはどのようなものだと思うか」を自由記載させ，欄外に示した分類に従って学生の子どもに対する認識の分類を試みたものである。看一では688の回答数が得られた。そのうちAの「明るい」，「無邪気」，「素直」などといった感覚レベルのとらえ方が60.0%と最も多かった。次いでCの「感受性が大」，「活発」，「元気」などの高次神経の特徴をとらえたものが22.0%，Dの「未熟なもの」などという成長，発達を感覚レベルでとらえたものが9.6%，Bの「接し方がわからない」，「手がかかる」など，自分が子どもに関わる行為のものとしてのとらえ方が8.4%であった。看二では，719の回答数が得られた。内訳は，Aが最も多く49.2%，次いでCが28.5%，Dが17.4%，Bが4.9%であった。

1983年と比較すると，看一ではA，Cは変化がなく，Bが有意に減少し ($p<0.05$)，Dは有意に増加していた ($p<0.001$)。また看二では，A，Bともに有意に減少し ($p<0.001$)，C ($p<0.01$) とD ($p<0.001$) がそれぞれ有意に増加していた。

これらから学生の子どもに対する認識は，直接子どもと関わった体験が影響していると思われるものは減り，漠然と知識的，観念的にとらえたものが増える傾向にあった。このような変化は，看二においてより著明であった。

5. 講義に対する期待

学生が講義に期待しているものを表8に示した。看一では，講義内容に関しては，「記載なし」が30.3%と最も多く，次いで「成長，発達について」は17.9%，「入院している子どもの看護」については12.4%であった。講義方法に関しては，「具体的にわかりやすく」が6.9%とやや多かったものの，他は少数であった。看二では，講義

表7　子どもに対する認識

		A	B	C	D	のべ回答数
看	1994 ～ 1998 年	413 (60.0)	58 (8.4) *	151 (22.0)	66 (9.6) ***	688 (100.0)
一	1978 ～ 1982 年	406 (62.1)	86 (13.1)	153 (23.4)	9 (1.4)	654 (100.0)
看	1994 ～ 1998 年	354 (49.2) ***	35 (4.9) ***	205 (28.5) **	125 (17.4) ***	719 (100.0)
二	1978 ～ 1982 年	491 (61.6)	94 (11.8)	180 (22.6)	32 (4.1)	797 (100.0)

複数回答あり
（　）は％
* $p<0.05$　** $p<0.01$　*** $p<0.001$

注）認識の分類
A：子どもを感覚レベルでとらえたもの（例；明るい，素直，無邪気，にくたらしい，生意気，無知）
B：学生自身が子どもに関わる行為のものとしてとらえたもの（例；抱きたい，触れたい，かまってやりたい，接し方がわからない，わずらわしい，手がかかる）
C　高次神経の特徴をとらえたもの（例；感受性が大，活発，元気，好奇心が旺盛，頑固，聞き分けがない，やかましい，すく泣く）
D：成長，発達の特徴を感覚レヘルでとらえたもの（例；成長が早い，可能性がある，未熟なもの）

表8　講義に期待するもの

講義内容	看一(n=218)	看二(n=219)
①成長、発達について（子どもの心理、行動、大人との違いなど）	39(17.9) **	20(9.1)
②子どもの病気と看護一般	17(7.8)	19(8.7)
③入院している子どもの看護（子どもの心理、行動、母親指導、臨床・実習に役立つ内容、小児の看護技術など）	27(12.4)	33(15.1)
④子どもの接し方や扱い方	31(14.2)	19(8.7)
⑤保育全般について（母親になっても役立つ内容）	14(6.4)	16(7.3)
⑥何でもいい、いろいろ知りたい	11(5.1)	7(3.2)
⑦わからない	8(3.7)	35(16.0) ***
⑧記載なし	66(30.3) *	43(19.6)
⑨その他	7(3.2)	17(7.8) *
講義方法		
①具体的にわかりやすく実際例を入れてほしい	15(6.9)	16(7.3)
②興味がわくような方法で教えてほしい	5(2.3)	3(1.4)
③論理的に専門的に教えてほしい	1(0.5)	3(1.4)
④今まで持っている知識が深められるような方法で教えてほしい	1(0.5)	7(3.2) *
⑤子どもに接する時間を多くしてほしい	3(1.4)	9(4.1)
⑥その他	1(0.5)	3(1.4)

複数回答あり
（　）は対象数に対する％
* $p<0.05$　** $p<0.01$　*** $p<0.001$

内容に関しては，「記載なし」が19.6%，「わからない」が16.0%，「入院している子どもの看護」が15.1%などであった。講義方法に関しては，「具体的にわかりやすく」が7.3%，「子どもに接する時間を多く」が4.1%，「今までの知識が深められるように」が3.2%であった。

比較するデータが不十分であるが，前回はどちらかと

いうと，看一では「成長，発達について」，「保育全般について」，「子どもの接し方や扱い方」など，広い視野での講義展開を，また看二では，「成長，発達について」，「入院している子どもの看護」，「今までの知識が深められるように」など臨床看護に直結するようなものを期待する傾向があった。しかし今回は，「成長，発達について」で有意に看一の学生の要望が多かったものの ($p<0.01$)，他の項目ではあまり違いは認められなかった。1983年と比べると，両学科の学生の講義に期待するものの差が小さくなってきていた。さらに今回最も特徴的だったのは，両学科ともに講義への期待に関して，「記載なし」，あるいは「わからない」という回答の学生が多かったことである。

III. 考　　察

今回対象となった学生の家族背景は，家族変動の大きかった1960年代に生まれた学生を対象とした1983年の調査と比較しても，大きな違いはみられなかった。しかし，社会全体の少子化や教育課程の違いが影響していると思われる若干の変化が認められた。今回の調査から明らかになった学生の子どもとの接触や認識の現状について考察する。

1. 看一の学生について

看一では，大半の学生は何らかの子どもとの接触体験を有しており，接した対象も「近所の子」が最も多かった。学生達は，いまだ地域社会との交流は遮断されずに育っている健全な姿を保っていた。しかし，子どもとの接触の程度は少なくなってきていた。また接した対象も，学生の家族背景に変化がないにもかかわらず，「近所の子」以外では「きょうだい」，「いとこ」，「親戚の子」など血縁関係にあるものをあげる学生が増えていた。つまり，子どもとの接触はあっても，それは身近で限られた範囲に狭められる傾向にあるといえ，これは他の研究[5-7]とも一致する結果であった。また学生の体験内容は，「抱っこ」，「本読み」，「戸外での遊び」などが多く，技術を要する世話というよりもどちらかというと，あやしたり，一緒に遊んだという程度の浅い関わりであった。吉永[8]，門脇ら[9]も看護学生を対象に子どもの世話に関する調査を行っており，技術を要する子どもの世話をした学生は少なく，学生は具体的に子どもをイメージすることが難しいと述べている。看一の学生の場合も，同じような傾向がみられた。体験内容では，「入浴介助」や「授乳」のような技術を要する世話の体験率は低く，概して学生自身が子どもへの対応に困惑するような状況は少なかったのではないかと予想される。これは認識面にも表れており，「手がかかる」や「かまってやりたい」などの直接子どもと関わった体験からくるようなものは少なく，「可能性がある」や「成長が早い」のような知識的，観念的なものが多くなっている。また，講義に対する要望で「記載なし」，「わからない」が最も多いことからは，文字通り子どものイメージが浮かばなくてわからないのだと思われる。その一方で，接触体験が少ないにもかかわらず，子どもに高い関心を示す学生が増加していた。これは比較する文献はみあたらないが，具体的なイメージを描きにくいことからくる未知のものへの期待かもしれない。

2. 看二の学生について

看二でも，ほとんどの学生が子どもとの接触体験を有してはいるが，接触の程度は少なくなっていた。看二の場合，入学前に実習体験を持っているため，接した対象では「入院中の子」が最も多くなっている。体験内容も，「授乳」や「排泄介助」など，技術を要するものも多い。今回の調査では，どの対象に対してどんな経験をしたかまでは問うていないが，これはおそらく実習での体験が反映されたものと考えられる。

また看二では，子どもへの関心が非常に高い学生と関心のない学生の両極に分断される傾向が認められた。古谷ら[10]は実習を通して子どもに対するイメージは，肯定的にも否定的にも変化し，それには子どもとの関わりの困難さが影響していたと述べている。看二の学生は，以前の実習体験での印象が子どもへの関心の両極化に影響しているのかもしれない。つまり，子どもによい関わりができた学生の場合は，子どもへの関心は高くなり，逆に実習で悪い印象が強かった場合は関心も低くなっていると考えられる。しかし，この関心は違う状況下では，全く逆の方向に変わりうる可能性をはらんでいるようにも思われる。

このように看二の場合，過去の実習体験が子どもとの接触状況や関心に与える影響が非常に大きいため，以前の実習でどんな子どもを受け持ったのか，その時の学生の印象はどうだったのかなどを知っておくことが重要だといえる。その一方で，「入院中の子」との接触が減っていること，つまり准看護師教育のなかで小児実習の体験をしていない学生が増加していることにも注目する必要があろう。

また看一同様，子どもに対する認識は，知識的，観念的なものが多く，講義への期待も「わからない」が多いなど，子どもの具体的なイメージは描きにくくなってきているように思われる。

ま と め

本学の看護学科学生における，子どもとの接触体験および認識の実態を検討した結果，以下のことが明らかになった。

1. 看一，看二ともに子どもとの接触体験の程度は減少していた。
2. 学生が接した対象は，20年前と同様，看一，看二とも「近所の子」が最も多かった。しかし，「きょうだい」や「いとこ」など，身近な血縁関係の子どもをあげる学生が増えていた。
3. 子どもへの関心については，看一では接触体験を伴わない関心の高さを示す学生が増え，看二では関心が非常に高い学生と関心のない学生の両極に分かれる傾向がみられた。
4. 学生の子どもに対する認識は，看一では感覚レベルのものが，看二では成長発達の特徴を感覚的にとらえたものが多く，両学科ともに子どもと直接関わることで得られるような認識は減少していた。

文　　献

1) 堤マサエ (1980) 家族の変動とその日本的特質，“現代社会の社会学”(現代社会問題研究会編)，川島書店，東京，p.25-46.
2) 目黒依子 (1999) 総論 日本の家族の「近代性」，“講座社会学 2 家族”(目黒依子，渡辺秀樹編)， 東京大学出版会，東京，p.1-19.
3) 鈴木敦子，山中久美子，藤井真理子 (1983) 家族変動および教育課程の違いからみた本学学生の子どもに対する接触体験と認識の状況．大阪府立看護短期大学紀要，5:79-87.
4) 楢木野裕美，鈴木敦子，藤井真理子，山田恵子，吉田智子 (1990) 本学学生の子どもへの接触体験と認識に関する横断的調査．大阪府立看護短期大学紀要，12:51-61.
5) 外間登美子，岡恵美子，坂元良子 (1998) 乳幼児との接触経験と母性意識について—女子学生のアンケート調査より—．思春期学，16:328-331.
6) 繁倉　迪，猪野郁子 (2001) 育児に関する学生の意識調査—子どもとのふれあい体験が及ぼす影響について—．小児保健研究，60:447-453.
7) 岩本真紀，近藤美月 (2002) 看護学生の子どものイメージに関する実態調査．香川医科大学看護学雑誌，6:137-142.
8) 吉永由美子 (1991) 保育所実習での学びと学生の背景—K 校を事例として—，第22回日本看護学会集録，p.325-327.
9) 門脇ミツ子，桑野タイ子，中村結花，吉田京子，西昌代 (1986) 看護学生の保育経験に関する検討，第17回日本看護学会集録，p.26-28.
10) 古谷佳由理，内田雅代，兼松百合子，武田淳子，丸光恵 (1995) 小児病棟実習前後における学生のこどもに対するイメージの変化について—受け持ち患児の年齢，実習病院，学生の不安・認識の違いより—．千葉大学看護学部紀要，17:97-104.